

わが友 ジャン・リュックへ (My friend / صدیقی جان لوك،)

ガザについて書いて欲しいという君からの手紙を読んだとき、いつもならすぐに返事するところを、今回は何日も黙ってしまった。私から言葉が逃げてしまったからだ。なぜかはわからない。朝早くに突然のミサイル攻撃で隣の家が倒壊したにも関わらず、私と家族が奇跡的に生き延びたからなのか？それとも、目にする光景があまりにも恐ろしく、どんな言葉よりも雄弁に物語っているからなのか？あるいは、75年以上にわたり日々の殺人、包囲、飢餓、国家テロにさらされている中で、自分たちの大義、権利について声を上げて来たのに、応える者はいなかった。もう言葉を空虚なものに感じているからなのか？

友よ、昨日、イスラエル占領軍はアル・アハリ病院を爆撃したよ。今わかっているだけでも500人を超える人々が殉死者となった。彼らは、体がバラバラになり、肉の山となった。

私たちは劇作家として、最も残酷な悲劇の一つが「アンティゴネ」であることを知っている。クレオン王はアンティゴネの兄の埋葬を禁じ、アンティゴネは、兄を埋葬しないまま去ることに耐えられなかった。尊厳、価値、権利とは何か……人間であるとは何を意味するのか？あの物語は私たちに問う。アル・アハリ病院で見た頭も手も足もない遺体は、私たちの時代の新たな悲劇だ。

瓦礫の中である老婦人が看護師に向かって、こう話しかけた。「そこに横たわっている手を私に触れさせてくれませんか。指輪で分かりました。私が頼りにしていた娘の手です。朝、ニュースを見るために椅子に座るのを手伝ってくれたその手。私のためにテレビのスイッチを入れてくれたその手。いつも抱きしめてくれたその手、肩を叩いてくれたその手。私の髪をとかし、いつも爪を切ってくれたその手。彼女は私に挨拶し、去り際に私の手にキスしてくれた。その手は私の力の源でした。彼女に最後のキスをさせてください。そうすれば、娘の体をこれ以上探す必要がなくなります。」

友人よ、私はもう何を書けばいいのかわからない。これが私のメッセージだと思うなら、君の友人たちに読んで聞かせ、感謝の気持ちを伝えてほしい。なぜなら、自由で、誠実な心を持った人間はとて少なくなっていると感じるから。

この手紙をガザから、大好きなラヴァルへ、そして愛するパリへ……いつか会いましょう。私が、この地球の他の住民と同じように自由になった時に。

2023年10月18日
アリー・アブー・ヤースィーン
訳 藤田ヒロシ
(2024.8.30)